

一定の形のない病気に形を与える医者

ふつうの医者は患者を診察し、脈博を検し、聴診器で患者の内臓の状態をさぐるうといたします。その病気が深く進行していかないかぎり、その病気は一定の形を備えていないのでありまして、何病だか医者自身にもわからないような漠然とした兆候があるのであります。これに医者が診断して一定の名称をつけますと、たいてい間もなく容体がハッキリした形⁴ として、そのつけられた名称の病気に断然なつて来るのであります。これはいわば言葉の力であります。天地が渾沌^{こんとん}としてまだ形がないときに、神が「光あれ」といい給^{たま}うたら光ができたというのと同じで、兆候^{たせう}が漠然としてまだ一定の形がない時、医者が「何病」だと宣言すると、その言葉が種子^{たね}となつて、二、三日もすると、いままで漠然としてハッキリしなかつた病状がその指名されたとおりの形にかたまつて来るのであります。だから病名を軽率にいう医者というものは多くの場合、病気の名付け親であると同時に、病気の生みの親であります。病気の生みの親の好きな人は、常に医者と仲好しにしていればよいわけでありません。

心を肉体に引っかからせるな

病気にかかるとすぐ医者のところへ駈けつけて、胃は悪くな

いか、心臓は弱っていないか、肺臓にラ。セルでも聞こえていやしくないかといういろいと詳しい説明をききたがる人がありますが、これほどまちがった治療法はないのであります。胃は悪いと宣告されれば恐怖心のためにじっさいその消化吸収能力をいちじるしく減退しますし、心臓は弱っていると宣告されれば恐怖心のためにその動悸は高まってきましたし、もしまた肺臓が悪いとでも宣告されれば、それこそこれは死病だという人類的恐怖がありますので、その恐怖を「肉体なる影」に映し出していよいよ本当に肺臓の組織までも悪くしてしまうのであります。

心が肉体の生理作用に及ぼす影響は実に恐ろしいものがあります。それはただちに血行を変化せしめます。たとえばわれわれは肩に力を入れれば肩が凝ります。肩が凝るといのは血液が肩に滞^{とど}つて新しい血液と入れ換^からないことをいっているのであります。静坐法^{せいざほう}などでは肩の力を抜く稽古^{けいこ}をいたしますが、この肩に力が這^{はい}入るといのは、心が上の方に集注しているから肩におのずから力が入るのであつて、決して「筋肉」という物質が、物質自身の作用でそこに力を入れるというわけではないのであります。心が持とうと思わない限り、どうしても鉛筆一本でも持てないであります。で、われわれが肩に力を入れたといふのは「心」が肩に力を入れたこととあります。「心」が肩に最も最初に鋭敏に「心」のとおりに動き出すものは血液なのであります。血は生命の根元ではなく、「心」の作用に最も感じやすい「心の影」なのであります。完全に血があつても心が死ねば、その人が死ぬ実例は前章にたくさんあげておきました。

ただ血は影の形に添うがごとく心の行くところに添うので、血は古来から靈性があるように思われて、日本の古書には「靈」のことを手と読ませたところがあります。

無我本然の状態に還れ

年久しく私は、神との対坐を祈りのうちにつづけてきたが、四十を越えて今日、端坐して祈るときの嬉しさと、平安と、休息をこよなくよるこんでいる。これまで、祈りをするのが何か特殊な変態の世界にはいつて行くように思われていたが、このごろになっては、睡眠と同様に一つの本能であることに気づかされてきた。綿のように疲れた体を床柱に凭らせ、しわがれた血の出る喉の呼吸をしずめ、しずかに神にすべてをうち任せて孤坐すれば、醒めたる靈に、睡眠以上の安息が与えられる。邪気は逃げ去り、神秘の靈域は眉間にせまり、火気なきトタン屋根の下にも、春陽の暖かさが通うてくる。求むるでもなく、せがむのでもなく、母の二つの乳房の間に、小さい顔をねじこんでいる赤ん坊のように、ただ神の乳房を両手に握り、静かに、静かに静坐すると、地震も、地這りも、暴風も、洪水も、災厄も、疾病もこわいものではなくなってしまう。わたしはもうすでに、無窮の愛に吸い込まれ、すべての不浄を忘れて神の懐に帰ったものである。壁も、トタンも火鉢の灰も、それらは神の乳房の毛孔のように考えられる。神の乳房に吸い着くことを知ったわたしには、徹夜の労作も、神の与え給う睡眠に均しい。ただ祈りはつづく、祈りはつづく。わたしの生命の祈りはつづく。神の乳房に吸い着いたわたしは、両眼をうち開いて、眠

りよりなお安らかな安息を味わう。

ヘンリー・フォードの致富法

記者——実は光明思想による事業経営の問題で、ぜひあなたの御意見をうかがいたいと思ひまして、ちょっとお騒がせ申したわけです。全世界はあなたが、世界最大の工場の一つ——フォードの大自動車工場の創立者だったことを知っています。僕は若い時には資本も何もないほとんど無一物だったあなたが、これだけの事業を成就したのには驚嘆せずにはいられません。その秘訣をうけたまわりたくてまいったのですが。

フォード——失礼ですがちよつとちがいます。君は僕がそのとき「ほとんど無一物」だったとおっしゃるが、正しいとはいえません。誰でもあらゆる物をもって出発する。すべてがわがうちにあるんですからな。

記者——まったくです。僕はその言葉を聞きたかったのです。あなたがこれだけの仕事をし、これだけ偉大な人類への貢献をするのに要るだけの巨富を集めたその力は、「すでに自己の内に無限の富がある」というあなたの自覚です。しかもあなたは、あなたの富を少しも重大視していない。そこがあなたのえらいところだと思つていゝんです。

フォード——そうですとも。富は仕事をする道具でそのほかのなんでもない。富は炉に投げ込む燃料とか、機会を回すベルトとかいうふうなもので——目的に達するためのただの手段なんです。

心の不思議な力

記者——ところで光明思想はアメリカのでも日本のでも、それをつらぬいている精神は、あなたもいつかおっしゃったとおりに「信じて自分自身を偉大なる者だと思い、必ずこうだと思えば、その瞬間から、そのとおりに自分と周囲というものが築かれはじめる」ということなんです。僕にとっては発明家、詩人、予言者——こういう連中は同じクラスに属する人たちですね。

この種の人は霊覚者です。ある種の洞察というか、霊覚というか——とにかくふつうの人以上のものをもっている。ふつうの人より先に、人力ではわからぬものをなんらかの方法によって何者かかに接触して知らされる。で僕があなたにうかがいたいというのは、あなたの心または経験のうちに、われわれよりも偉大な、われわれの触れあう力を御経験になったことはありませんか。それをうかがいたいです。この力をあなたは神とお呼びになるかもしれないが、そんな力にいつも同化していることがあなたには可能ですか？ あなたはそれを自覚していますか？ この力に触れるために毎日の生活に規則正しく意識的になんらかの努力していられますか？

フォード——わたしは霊界に来て、いつそうその力がすべてだということがわかりました。いっさいの根源がそこにあるんです。われわれは、ただその力を認めるだけのことです。すべてのものの精髓せいすいと本質とがそこにあるのです。われわれが霊と良い物質せいしつというものは一つですよ。霊と物質とは一つの全体です。僕は「霊」とか「物質」とかいつてぜんぜんちがう反対のものがあるように考えたくはない。この二つはまったく一つで

す。全体の裏表なんです。この力と接触する道は、最大多数の人間に最大多数の善をなそうと思つて、自己の生活を正しくすることですよ。僕が自己の生活を正しくするというのは、最大多数の人間に最大多数の善をなそうと心がけることなんです。

記者——それだけで全部ですか？

幸福の天使のような霊的元素体

フォード——これから説明します。各人は自己自身が一個の宇宙なんです。それと同時に全宇宙の一部分なんです。全宇宙すなわち「全体」のなかにわれわれは浸ひたって生きている。その全宇宙の中心が自分なんです。この自分という中心が小さい霊体（目に見えない生命の霊的元素）を引き寄せて自分自身を築きあげるので、自分のなしつつある営みにこの生命霊的元素体が引き寄せられて加わつて、その営みを大きくしてくれるのです。われわれが何を希望するにもせよ、それは心相を集中してその実現を念じ、その目的実現に向かつて動き出せば、この生命の霊的元素体が集まってきて、われわれを助けて自分の希望する物を形に築きあげてくれるのです。正しいこと有益なことをしつつある人は、

誰でもこの霊的元素体助けをうけることができます。この生命の霊的元素体は外からやって来て助けてもくれますが内からも出て行くのです——自分の想念を乗り物として出掛けて行き、必要なものを持って来てくれるのです。この霊体は、われわれの向上進歩を形づくる実質になるものです。この霊体の性質や分量は、各人の想念こころのタイプにしたがって決まるのです。

フォード——（語をついで）この靈体を神秘的な遠いところにわれわれと離れてあると考えるのはまちがっている——みんなここにあるんです。すべて準備されている。何もかもここにちやんとある。われわれの内にあり外にあり、われわれはそれに包まれている。インドのヨガラ出札がプラナとっているような一種の生きた実質ですね。われわれは想念によってそれを受けて使うことができるのです。よいことでも悪いことでも、これが想念を伝達する。自分が実現したいと思うことをハッキリと心に観る。するとプラナの波動が、その想念を中心にして動きはじめます。この靈体が助けに来る。また自分の方からもこの靈体が出かけて行く。必要な要素と靈感とが集まって来て、事柄がすらすら運んでゆきます。

記者——目的の実現しているさまを心にハッキリ思い浮かべれば、心に浮かべた状態はその時から形をとりはじめるのでしよう。

フォード——そうです。この靈体がわれわれの希望のぐりに飛んできて、絶えまなくそれを形に化しはじめます。希望の実現を心に描くこと、それを心にハッキリと観ること、つまり、心で事物の雛形をつくるのです。——これが信念です。信念はこれから形になろうとするものの実態になるのです。また人類の多くは信念というものがどんなに実験的なものか「実質的」なものかを知らないようですね。僕は「実質的」だという言葉を、ほかの人が心靈的だというところに使うのです。なぜって、僕は「生命」と「宇宙」との実質について考えているんですから。人間は一つの宇宙であって、その宇宙にはさっ

きいったある靈体、すなわち「生命の靈的要素体」が無数に棲んでいる。そして人間自身はこの無数の靈体を支配し統率する大生命であり王者であるともいえる。ある人は人間を「靈」だというが、靈はまさに事物の「実質」であるんです。

記者——あなたの「生命の靈的要素体」のお説はなかなかおもしろいと思います。この靈体を仮定すると、心に起こった原因が形という結果に現われるまでの方法、過程がハッキリしますね。というのは、原因が結果を持ちきたすには、力の実際の移動がなければならぬ。つまり実際の仕事を実現する実質とか生命力とかいうものが移動しなければならぬ。さっき僕は「靈覚者」という言葉を使いましたね。そしてある鋭敏な直覚とか、ふつうの人とはちがう第六感を備えてでもいるような人のことを話しました。

フォード——ところが、それは体験の問題です。ある人はそれを特殊の才能だとか、天賦だとか考えているようですが、それは人生をいく度も生きてきた人の長い経験の結果だと思えます。人生をいく度も生きるというのは、僕は人間が生まれ代わるものだと信じているという前提に立つことを断つておかなければならない。君、われわれはなんべも生まれかわる。われわれはいく代も経験を積む。そしていく代の経験をたくわえるかもしれぬが、それは実に刻苦して得た経験の賜です。これはわたしが靈界へ来ていよいよ明らかになったところですよ。

記者——ではあなたは、発明家、詩人、予言者……などという事物を先見し、事物の深いところが、ふつうの人よりもよく

わかる人は、この世に生まれ代わって来るまでの前世ぜんせいにおいて生活した経験がふつうの人よりも広いというのですね。

フォード——そうです。そういう人たちはみな生命としての年長者です。キリストは肉体は三十歳でも生命は年長者であったのです。

記者——ところで、あなたはスウェーデンボルグを知っていられるでしょう。スウェーデンボルグは、あなたも知っていられるとおり、当時では、全世界で最も有名な科学者の一人でした。彼はストックホルムに住居をかまえていたが、百マイルもへだたったある市で、ある晩その市長と晩餐をともにしていた。高官の紳士たちがその晩餐の席には連なっていた。晩餐の進行中突然スウェーデンボルグは、何やら言い訳をいしながら起ち上がってベランダへ出かけていった。すぐ市長もそのあとからベランダへ出かけて行った。するとスウェーデンボルグは市長はじめ皆のものに、今ストックホルムに大火があるといつてその有様を説明し出した。その火事はどこから始まって今どこが焼けているかという詳細の有様を目に見るように説明する——そのうちにしだいにその火は消えたが、どこが消えたかということをはつきり言った。市長はあまり珍しい事件なので、スウェーデンボルグのいった事を詳しく書きとめておいた。その後、使者がストックホルムの火事の報告書を持って来たところ、スウェーデンボルグが晩餐会の席上で述べたところと一分一厘違わなかった。あなたはこの科学者のこの種的能力をなんと説明されるのでしょうか。

フォード——スウェーデンボルグは自己の内にもあり外にも

ある例の靈的要素体を遣わしたり受けたりすることのできる能力者だったのです。これはいく度も生まれかわつた高級靈にのみできることです。

見えざるわれらの協力者

記者——あなたのいわれる靈的要素体というのは、思念は生命体である、思念は実体であるということですか。

フォード——なんといいかどうも容易に適当な言葉が見つからない。われわれはそいつをつるはしにかけて掘り出すことはできないんですからね。肝心の相手が心なんですからね。われわれは心よりほかに働かすべき協力者はない。念波とか精神波動とかいう学説は今のところ僕にとっては一番確定的な学説のようですね。ちょっと研究すればその説明はすこぶる簡単のようです。僕の考えでは思念は力である、また言いかえると思念は生命をもっている——これはどちらでもあなたのおすきなように解釈されたいが、ともかく、思念というものはわれわれから出しゅつ入しゅつ去しゅつ来しゅつする小さな生命体で成り立っている流れですね。それは波動であると同時に、生命の粒子である。

自己と外界とをつなぐ靈的小生命体

記者——あなたが「靈的要素体」とか「靈体」とかおっしゃったものの意味がだんだん掴めて来たように思われます。この「靈体」こそ肉体を司どり、おそらくは脳髓に精神作用を起こしている生命力なんでしょうね。あなたはそれを靈体をもった靈知的エネルギーとお呼びになりたいんでしょう？ わたしの

考えでは、われわれの肉体細胞の一つ一つは、一個の靈知の中ちゅうずう 枢しゅうをもっている。それはいわゆる脳髓のうずいではなくとも、少なくとも靈知を備え、その靈知の中ちゅうずう 枢しゅうになるべき「靈知的小生命体」をやどしていることを、人間はついに発見するに相違ないと思うんです。

フォード——細胞にも小さい靈魂がある。外界にも小靈知体がある。この靈知的小生命体はわれわれの肉体細胞と同じように組織的に集合している。それはたがいに結合して、われわれの人格を形造っているのです。われわれがある人のことある目的のことを思うと、われわれの人格のエネルギーの一部がこの靈知的小生命体に乗って、その人のところや、目的物のところへ達するのです。またこの靈知的小生命体はわれわれの内にあるばかりではなく、われわれの外にもある。われわれを取り巻いている雰囲気となっていて、われわれの人格や精神状態や健康状態にいろいろ影響を与えているのです。われわれは気分をかえたいとか、健康状態を変化したいかと思うと、旅行をしたり、転地療養をする。そしてやってみると、なるほどきまめがある。なぜだと思えます？ あれは常に自分の周囲をとりまいていて新鮮な影響を与えなくなった靈知的小生命体をあとにして、新しい雰囲気を造っている靈体の集まりのなかへ突入して行くからなんです。快速力でできるだけ遠方に行く方が、今までの雰囲気を置いてきぼりにするのに都合がよい。僕は住居や土地を変える効果を感じています。われわれは住居や土地をかえることによって古い雰囲気から脱して、新しい「靈知的小生命体」に触れることができるんです。この点では靈界では便

利です。思念の力で、乗り物もなく自由に長距離のかなたへ行けますからね。

記者——ではあなたはわれわれの内外にともに「靈知的小生命体」が集まって雰囲気をつくっているとおっしゃるんですね。

フォード——われわれの生命はその思念の力によってわれわれのおのの周囲にこの「靈知的小生命体」を引きつける一つの中心なんです。周囲に引きつけたこの小さな生命体は、やがてわれわれ自身の一部分となってわれわれの指図のままに、われわれの性格どおりに活動するんです。

記者——わたくしの考えでは、宇宙のすべての事物の根柢には「無限の大生命」があつて、それがすべてを生かしている。それがすべての存在をささえている。だから、この無限の大生命こそいっさいの存在の靈的根源だが、あなたのお説は、この大生命が個性をもっているいろいろの相すがたにあらわれる方法、換言すれば一つの大生命が個別的表現をとって、われわれの周囲にあらわれる過程を説明しておもしろいと思います。「想念」と「存在」とはわたくしにいわせればまったく同じものの裏おもてです。

フォード——そうです。「想念」と「存在」とはまったく同じものを指したのです。「想念」なしに「存在」はないし、「存在」のあるところ必ず「想念」がそこに現われているのです。

記者——われわれは心の思いすなわち想念をば、力であると認めざるをえないのですが、もし想念が力ならば、この力をなんらかの方法によって開拓して、ふつうの人以上に有効に利用する方法があるにちがいない。精神統一によって一定の方向に

思念を導くことによつて？

持続的に希望の事物に専念せよ

フォード——思念を集中すれば、そこに靈知的小生命体を引き寄せる中心磁力を生じます。たとえばある事業に思念を集中するならば、その思念の磁力にてその事業を成就するに必要なあらゆる要素が集まってくるのです。志すものを大いに絶えず強く思えばその事物は引き寄せられて来るのです。われわれがいろいろの事業をやりかけてみて成功しないのは、その志すものを絶えず強く熱意をもって思わないからです。志す事物を招び寄せるのには、その思いを中断せずに、気長くその希望と熱意とを持続しなければならぬ。短気で、すぐ失望するようではだめです。その事物が成就するのに適当な条件を引き寄せるにはあるいは三、四カ月かかることもあるし、時には、六カ月かかることもあります。ともかく、思念を長期間持続的に集中することは、必要な事物を引き寄せる磁力となるのです。すなわちその事物を成就するに必要な要素——靈知的生命体がある人の周囲に集まつて来、それが自然にその事物の成就のために働いてくれるのです。要するに持続的に志す事物に思念を集中してやまなければ、事物それ自身は、ただそれだけでできあがるのです。それは思念は事物の実体だからです。想念そく事物だといってよろしい。

記者——想念は力である。類は友を招ぶ、同種の想いは同種の事物を造り上げる。だから自己の思想を成功に向けるか失敗に向けるか、光明こうみやうに向けるか暗黒に向けるかということとは、

その人の生涯を決するのだとわれわれは常に説いているのですが、この説にはおそらくあなたも賛成なのですね。

フォード——そうです。「類は友を招ぶ」のです。苦難を起こしたいと思つたら苦難を想うがよい。その人には苦難がやってくる。

右にその要旨を引用した文章の中で、記者の言葉は、アメリカの有名なる光明思想家ウオルドウトラインの語である。このわれわれのために働いてくれる靈知的微小体を、ハービー・ハードマン博士は「視えざる協力者」(Silent Partner)といっています。この「視えざる協力者」と協同一致して事業を成就するためには、神なる無限供給者・無限英知者・無限生命者と一体であるとの自覚を深めることにまさるものはありません。たといわが個ひとの力は弱くとも無限量なる神がわがためになし給うであろうとの、いと深き自覚を得ることが必要なのであります。

「生長の家」の誌友には、この信念に達していられるгүйぶん信仰の深い方が多勢おおぜいありまして、日々神の無限量を目のあたりに見せていただいているのであります。なんでも自分にぜひ要ると思うものは不思議に誰かが持つて来てくださるという事実であります。これは理論でも、推理でも、想像でもないのではありません。実際日常生活にたびたび目撃し体験させられる事実であります。

かつてわたしが『生長の家』誌を創刊するについて、子供とお仲間を使つていた小さな机では、原稿書きと、雑誌の発送と、

子供の勉強とに兼用するにはあまりに狭くて不便になって来ましたので、家内が「もう一つ机が欲しい。買ってください」というものですから、「生長の家の出版で経済に余裕がないからもう少し待て」といつていますと、その翌日、大阪の松本外次さんから「あなたに机を造ってあげようと思っていました」という意味の手紙をいただいたのであります。家内が机を欲しいといつていたちょうどその日に、松本さんのお書きになっていたお手紙だったので神さまはわれらになくてはならぬものを知り給うと、その時も互いに語り合って感謝したのであります。現在もその机を私は執筆に使っているのであります。

こんな経験はわたしばかりではなく、今は故人であるが今井楳軒先生や尼崎にいられる杉江重誠さんなどは常に経験しているものには誰にでもあることでありまして、私に机をこしらえてやろうといわれる松本さんなども「明日の用意はしていない」で別にそれで生活にお困りにはならないのであります。

こうなると、もうわれわれには経済的不安はないのであります。生活に必要なものは必ず神が誰かの手をとおしてわれわれのところへ持って来てくださる、ということが理論ではなく実際にわかってくるからであります。すべての人類がこの経済観に達すると財の循環と分配が完全に行なわれて地上に経済的天国ができあがるのであります。各個人がこの境地に達するにはどうすればよいかと申しますと、自己と神すなわち無限供給との一体感を深めればよいのであります。「メタフィジカルヒーリング」と申しますのは、この「神と自己との一体の自覚」

から起こるところのおのずからなる「神の癒し」でありまして、手のひら療治りょうじその他の霊力治療のように病気を癒すだけではなく、われわれの生活において治してもらおう必要のあるものいっさいについて与えられるのであります。神の子たる人間は生活難にくるしみように造られていませんから、さきに申しましたように、経済的にでも欲しいものは、どこからか自分の手に入るようになるのであります。これは術者が霊力で治すのではありません。指導者は「神想観」によって神との一体感を深くする道を開くだけでありまして、あとはその人その人の修行と信念の深さだけのおかげを受けますのであります。この修行というのは主として「神想観」であります。要は神との一体感が深くなればおのずからなくてならぬ物は手許に集まり求むるとおりに癒されるのであります。副修行法としましては、『生命の寶相』第四巻に説明いたします『自己暗示』の法を応用せられるとともに、常につとめて信仰を高むる言葉を読むようにしなければなりません。ある誌友は『生長の家』誌を読んだだけで病気が治ったといわれました。またある誌友は『生長の家』誌をポケットに入れて出ると、その目終日気分が明るくて仕事が順調に運ぶといつてよこされました。これはなぜかといますと、真理の言葉の書かれてある書物には真理の霊波がありますので、言葉の霊波で信仰が高まり、信仰の精神波動が霊界の善霊を引き寄せてその人の気分を快活かいかつにし、かねてその人になくてならぬものを招き寄せてくれるのであります。書物に印刷された真理の言葉に霊波があるといひますと、迷信だと思ふ人があるかもしれませんが、書かれてある言葉も発声される言葉

と同じように靈波があるのであります。古来から『大般若經』をペラペラ病人の前で翻^{ひるが}えすだけで病気が治ったり、憑きものが落ちたりすることがあるのは書かれてある言葉の靈波によります。また神社などからもらう護符や、お守り、虫封じの符などは相当効力のあるもので、それは必ずしも

迷信とはいえない実証があります。ティーズデッド氏よりの靈界通信によりますと「あなた方に、はたして会得しうるかどうかしれないが、あなた方の有する書物——印刷し、装丁してあるドッシリ重い書物は靈界より観れば一つの光休である。書物の生命はその光の価値でままる」といつているのであります。

これによればどんな部厚い書物でもただの紙屑にすぎないものもあれば、片々^{へんべん}たる冊子でも神仏の護符同様靈光燦然^{さんぜん}たるものがあるはずであります。しかも、その靈光にもいろいろの種類があるので、読まずにただそばに置くだけでもわれわれの心に悪影響を与えるもの、良影響^{りやう}を与えるもの等^{とう}さまざまあるわけです。総じて明るい言葉を書いた書物より発する光は善靈^{ぜんれい}を呼び、暗い言葉を書いた書物より発する光は悪靈^{あくれい}を呼ぶのであります『法華經』や『甘露の法雨』が、それを受持し、書写し、読誦^{どくじゆ}するだけでも功德があるというのは、その言葉の靈波のしからしむるところだと考えられるのであります。